



北浜コラム vol.1

2010.04～2011.07

ふれあいの家ーおばちゃん
ち

「冒険ひろば」はヨーロッパ生まれ、日本では世田谷から全国に広がっています。「自分の責任で自由に遊ぶ」をモットーに、一般の公園ではできにくい「火・水・木・土」と親しむ遊びや活動を大事にしています。北浜は街中の小さな広場です。ここでできること、ここでしかできない活動をこのまちの方々と共に、創っていきたいと思います。

冒険遊び場は、普通の公園ではできないことができる公園です。たとえば、木登り、穴掘り、火おこし。そこにはもちろん危険が伴いますが、「危ないから禁止する」のではなく、子ども達のやってみたいを大事にします。「どんな風にしたらケガをするかもしれないのか??」を子どもが自分で考えながら遊ぶこと、そのことが子どもに欠かせない体験だからです。

火はいつの時代も子どもの心を誘います。それは、人類が火を使うことによって、身を守り文明を作り出してきた原初の記憶だとも言われています。古の物語でも、火は幸せの象徴として登場します。暖炉や焚き火、囲炉裏端、人々は火を囲み笑いあいます。

しかし火は同時に恐ろしいものでもあります。最近子どものライターによる火遊びが原因とみられる火災のニュースが続きました。「火遊び」を隠れて行う「いたずら」ではなく、自然とのつきあい方を学ぶ機会にしたいと私達は考えています。この広場には焚き火師がいて、水曜と土曜は火おこし体験ができます。火とのつきあい方を学べる公園は、品川では唯一この広場だけです。

リスクとハザード

子どもには怪我をしないで遊んで欲しいと誰もが願いますが、遊びの魅力は危険と背中合わせのところにあります。

リスクとハザード。私たちは危険をこの2つに分けて考えています。例えば高い所に登ったり飛び下りたりするのは子ども達の大好きな遊びです。もちろんこの遊びには危険がともないます。しかし自分の力量を計りチャレンジすることにより、しなやかな身体と心を得る機会にもなるのです。この危険はリスク。見極めることにより、成長のハードルになります。一方、登ろうとする木が腐っていたり、飛び下りる所に石がゴロゴロしていたり、大人が気を付けなければ大きな事故につながってしまう危険、これがハザードです。

冒険広場では木登りができますが、自分で登れない木に手を貸して登らせることはしません。ハザードにつながると考えているからです。

自分の冒険にチャレンジする子どもを、冒険広場は応援します。

木登り

北浜こども冒険ひろばでは木に登ることができます。木に登れば世界はいつもとちょっと違って見えます。風が吹けば木の葉が揺れ、海に浮かぶ船のよう。鳥や蝶、アリやヤモリ、いろいろな生き物も近くに感じます。だから木登りはこどもの大好きな遊びなのです。

もちろん木は遊具ではありません。細い枝や枯れている枝に登れば折れてしまいます。柿ノ木に登って折れてしまったことをこども時代の思い出として話す祖父母の世代の方によく出会います。それだけ身近に木登りがあったのでしょうか。木登りで一番大切なのは木に心をよせること。木と友だちになることです。「こんな細いところに登ったら木がかわいそう」そんな思いがこどもたちと木を守ってくれます。子ども達が素敵な木の友だちを見つけてくれることを、私たちは願っています。

秘密基地

「わかっていたんだ 悪いのは・・・でも面白かったんだよな」
その言葉とともに、急に子どもたちの目が輝いた。

子どもたちは叱られる。そして秘密基地は追われていく。
それでもまた、子どもたちは作り出す。
子どもたちにとって秘密基地とはいったい何だろう。

時がゆっくりすぎていく
小さくせまく汚い小屋の中で
たわいなくふざけあう 仲間との日々
太陽と汗とホコリのニオイ
それは何よりもかけがえのない時
ゆっくりと豊かに 時が流れる
目をこらし 夢を見る
誰かが 突然 海賊船だと叫ぶ
一人のイメージの中へ みんなが乗り出していく
今 その時にしか 生まれない 夢

秘密基地は、子ども時代そのものなのかもしれない...

ドングリ探検隊

キャンピングコンロとゴマ煎り器、そしてコップとタオルをもってドングリ探検隊は出かけます。ドングリを見つけると、その木の下で煎って食べてみます。食べられないドングリはありません。日本人は縄文時代からドングリを食べて生き抜いてきたのです。もちろんほとんどのドングリには渋があります。

たとえばクヌギ。丸々していて食べでがありそうです。煎ると香ばしい匂い。むいてみても栗のようにおいしそう。口に入れても、栗のよう…。しかしすぐ後に襲ってくるのは、強烈な渋。口がとんがってしまうほど（笑）。でもこの渋さの経験が今の子どもたちには大切だと思うのです。もちろん渋がほとんどないドングリもあります。スダジイ、マテバシイです。特にスダジイは生のままでも美味しいです。おつまみにも最高！実はこの町にはたくさんのスダジイがあります。昔神社で煎って売っていたこともあるといいます。皆さんもドングリ探検隊に出かけませんか。

たき火の匂い

垣根の垣根のまがりかど

たきびだ たきびだ 落ち葉たき

あたろうか あたろうよ

北風ぴーぴゅー吹いている

その昔、まちの至る所でたきびがたかれていました。それは 落ち葉などを燃やし処理をする
といことだけでなく、その煙が、ネズミはもとよりさまざまな害虫を駆除したからです。今の害
虫駆除の燻煙剤よりも安全で、おそらく効果もあったと思います。しかし今はこの煙が嫌われて
しまってます。なぜでしょうか。その一方、最近ではこの煙の匂いにリラックス効果があると言
われ、アロマとして売られているのです。昔の人びとがのんびりしていたのは、ひょっとしてこ
の焚火の匂いが、まちにたちこめていたからかもしれませんね。

あなたはたき火の匂いが好きですか？北浜公園では空き缶たき火をお勧めしています。

空き缶たき火の勧め

昔はそこらじゅうで焚き火が見られましたが、今、街中で焚き火は難しいですね。そこで私は空き缶焚き火を勧めています。

焚き火の一番の困りごとは、後片付け。でもこの空き缶焚き火なら、ふたをすれば簡単に火が消えてしまいます。小さなクッキー缶での焚き火。こんな小さな焚き火でも、お芋が一本ぐらいなら焼けます。マシュマロ焼きも楽しめます。

ただ配慮しなければいけないのは、ごみや紙を燃さないという事。近隣の一番の迷惑は、紙の黒い灰が飛んできて洗濯物についたり、いつまでも庭の隅っこに残ってしまうことなのです。そこで火は木を削り、削りかすで点けましょう。（もちろんマッチで点けますよ）削りかすの次は、割り箸くらいの木、次はその倍くらいの木...とゆっくり火を育てていきましょう。

子どもたちはいつの時代も火にあこがれるもの。でも正しい付き合い方を知らないと、大変な事故につながります。危ないからと火から遠ざけしないで、火の扱い方を学ぶ機会を大人が作ってあげなければならないと思います。ヒトは火によって人間になったのですから...。もちろん焚き火をするときには、軍手と水を忘れずにね。

ゴム段

1980年、私は新宿から埼玉のベッドタウンに転居しました。

ゴム段は当時の小学生の大流行。新しい学校でもそこかしこでゴム段遊びが行われていました。「ゴム段」とは、一本ないし、2本に渡したゴムを歌に合わせて飛んだり、または段階的に飛んだりする主に女子の遊びでした。

20分休みには、誰も教室に残ることなく女子といえばゴム段。放課後もゴム段。当時の習いごとといえば週4回のソロバン教室で、その待っている時もゴム段。いまの子たちがどこでもDSをするように、私の小学3・4年生時代は、日々「ゴム段」漬けの毎日でした。うまくなるために電信柱と門柱にゴムを張ってひとり自主練もしたっけ。その甲斐あってかなかったか、いつの間にかあだ名がつくほど、クラスに溶け込んでおりました。

あれから30年、先日ふとした拍子にゴム段を思い出し、北浜公園で興じたところ、体重は当時よりも3倍！にもなっているのにも関わらず、今の小学生たちよりも身体が動くではありませんか！「雀百まで踊り忘れず」。折りしも某TV番組でゴムダンスというのが流行りつつあるようですが、私も覚えちゃおうかなー。もうちょっとやせたら、もっと飛べるんだから。まだまだ子どもたちには負けないぞ〜。(たけ)

みちのプレーパーク?!

こども冒険ひろばのある北浜公園は、木造住宅に囲まれた小さな公園です。商店街から路地をちょっと入ったところにあり、ご近所のみなさんの抜け道にもなっています。

子どもたちが遊んでいる傍らで、近くで仕事をしている方が遅めのお弁当をひろげていたり、買い物がえりのおばあちゃんが目を細めながら通ったりします。慣れない手つきでコマ回しに挑戦している親子を、笑顔で眺めていたおじいさん。ひろばスタッフがお願いすると、快く技を披露してくれました。

「よかったら火にあたっていきませんか」「ちょうどお湯が沸いたので、ご一緒にお茶でもいかがですか」と少しだけお声かけをします。はじめは遠慮がちだった方も、だんだんに打ち解けて焚き火を囲みます。子どもだけでなく、この街でともに暮らすいろいろな世代の人たちがひろばに集います。

住宅地にあるために、大掛かりな冒険あそびが難しい北浜こども冒険ひろば。でもここでは子どもの遊びが、昔と同じように人々の生活の中にあります。近くで見守り、いけないことは叱ってくれる人の目があります。全国的にも珍しい(?)この冒険ひろばを、大切にしていきたいと本当に心から思うのでした。(ゆきえ)

穴掘り

「ここさ、宝が埋まってるんじゃない」「そうだよきっと」「海賊の宝だよ」

子どもたちが穴を掘っている。もちろん適当に掘った穴なのだから、宝が埋まっているはずはないと大人は思ってしまう。でもなぜかそんな気になってしまう。だから穴は不思議なのだ。

「これ恐竜の歯の化石だよ」「これ肉食獣だぜ、とんがってるもの」

掘り出されるものは、いつのまにか宝や化石になる。博物館が生まれる。

「この下に地底人が住んでいたらどうする」「夕ご飯食べていたりして・・・」
「天井に穴開けたら怒るよ」「こらあ！なにすんだ～とか言って」（笑）

おしゃべりのキャッチボールは続く。物語はぐんぐん面白くなる。

子どもたちが穴を掘っている。その後姿は考古学者の様でもある。そこに何が埋まっているのか。
未知なる宝か、はたまた忘れられたシャベルやカップか。だれにも分からない。でも確かに言える
事がある。そこには限りない夢が埋まっているのだ。

「土って温かいんだね・・・」地面に座っていた女の子がつぶやいた。

(みやさん)

どろだんごの作り方は子どもに聞こう

「どろだんごの作り方教えてください」

時々言われることがあります。ピカピカ光るどろだんごはブームにもなりました。ホームページで教えている人もいます。本も出ているし、講習会もありました。でもどろだんごにはそれぞれの場所に伝説のような子どもたちの科学があったのです。

確かに科学的に解明されたどろだんごの作り方に基つけば、ピカピカのどろだんごができます。でもそれこそが本物のどろだんごだと思ったら、子ども科学者は息を潜めてしまいます。

この土の後は、滑り台の下のサラ土をつけて、公園入り口の銀砂をかける。

子どもたちは実験を繰り返し、口伝えでその秘伝を送って行ったのです。

どろだんごの作り方は子どもに聞きましょう。知っている子どもがいなかったら、子ども科学者の出現を待ちましょう。

それは町の宝になるからです。

(みやさん)

一本のロープ

木に一本のロープをぶら下げておきました。男の子がやってきて、ぶらさがって遊んでいました。そのうち、ロープによじ登ろうとしました。ところが登れません。

そこで彼は、ロープの片方の端に右足をしばり、もう片方を引っ張って上にあがろうと考えたのです。ところが思いっきり引っ張ると、右足だけが上にあがってしまいひっくりかえってしまいました。それでも彼はあきらめません。今度は左足もしばって・・・でも引っ張るところがありません。そこで彼はそのままロープをよじ登っていきました。

大人が考えれば、無駄なことのように思います。でも彼はここで仮説・実験・検証を繰り返しているのです。初めと次のよじ登りは、同じように見えて彼の中では全く違います。やがて彼はブランコ作りの実験を始めます。

北浜こども冒険ひろばは、こんな遊びの実験にあふれています。そしてこんな素敵な子ども科学者がたくさんやってきます。

私たちは子どもたちの遊び力を応援しています。
(みやさん)

あそびを生み出す魔法の品々 段ボール

ある日のこと、お兄ちゃんたちが大型遊具で遊んでいるのを見ていた男の子。

自分もやろうとしますが手が届きません。そこで段ボールを持ってきて、上に乗り手を伸ばす。でも手が届きません。あと少し。そこで彼は段ボールの上でジャンプ。もちろんズボッと底が抜け段ボールの中に・・・大爆笑。

悔しくなった彼は、そのダンボールをけりました。するとお兄ちゃんたちがけり返し、いつの間にかサッカーになっていました。段ボール箱サッカーです。

そのうちけられた段ボールがひっくりかえり口をあけました。そこで一人が中に入ります。こうなるともう乗り物なので引っ張るしかありません。でもやはりダンボール。びりっと裂けて、中の子どもは後ろにひっくり返る。またまた大爆笑。破れた段ボールをもって、中の子がみんなを叩こうと追いかけてまわします。楽しそうな歓声が公園中に響き渡っていました。やがて段ボールは公園の片隅に捨てられ、子どもたちはまた違う遊びに・・・。

段ボールによって遊びが引き出され、あそびが変化し、やがて遊びは段ボールを超えていく。子どもたちにとって段ボールは遊びを生み出す魔法の品々の一つなのです。

(みやさん)

北浜コラム vol.1

<http://p.booklog.jp/book/29039>

著者 : obachanchi

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/obachanchi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29039>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29039>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.